

『ヒミツは子供が寝たあとで♥』

著：高月まつり

ill：明神 翼

「晴真、僕は大丈夫だよ！　びっくりしたけど助けてもらったし！」

腰に手を当てて威張る姿が生意気で可愛いが、父親を名前で呼ぶのはどうだろう。

さっきは礼儀正しそうだと思っていた勇生は、少々驚いた。

「ああそうだった。うちの静希を助けてくださって本当にありがとうございます……」

美形の若き父親は、途中で声を止めてじっと勇生を見つめた。

どうかしたんだろうかと、勇生も見つめ返す。

「見つけた」

「は？」

「俺の……女神……」

「俺は男で人間です」

「いやいやいや、違う。言葉のあやだ。理解しろ。とにかく、お前は俺の運命だ。名前は何という？

俺か？　俺の名は海堂晴真。九月三十日生まれのB型で、現在二十八歳。趣味は手芸。最近作り上げた作品はパッチワークのベッドカバー。食べ物の好き嫌いは何もない。お前が作ってくれたものなら、たとえそれが消し炭だろうとダークマターだろうと、喜んで食べよう。そして愛に殉じよう。ひと目会ったその瞬間に恋に落ち、愛を乞う。ああ俺の天使、お前の名前は一体なんだ？　年は幾つだ？　教えてくれないなら十四歳のジュリエットと呼ぶ」

何言ってんの？　この美形。淡々と言うところがまた怖いんですけど。

こんなに綺麗な顔をしているのに、この男は何かしら電波を受信しているようだ。こんな物言いではなければ、もしかしたら男でもときめいたかもしれないのに。本当に勿体ない。黙っていればきっとドキドキしたのに。電波だなんて。今時こんな流行らない。

ドラマティックな一目惚れはなかなか難しいものだと勇生は頬を引きつらせて、自分を鬱陶しいほど見つめている電波美形を見つめ返す。

名前を教えたくはないが、このままジュリエット呼ばわりされるのはもっと嫌なので、仕方なく「吉松勇生、二十六歳」と答えた。

「吉松勇生……とてもいい名だ。その、生意気そうな少し吊り上がった大きな目がいい。低すぎない標準の鼻は、キスをするときに邪魔にはならないだろう。なかなか目鼻立ちは整っていて美形なのにそれに無頓着そうなところなど最高だ。あと、俺より小さくて可愛い。俺が愛するに申し分ない。素晴らしい。今から勇生と呼ぶぞ？　いいよな？　呼ぶぞ？　本当に呼ぶ」

子供の頃から二人の姉に「お前のようなタイプの顔は、世の中のテンプレの一つで、いろんなところにゴロゴロいる。調子に乗るな」と言われ続けてきた勇生は、晴真が自分を淡々と延々と賛美する様子に引いた。誰が美形だ、誰が可愛いだ。俺のわけあるかと、心の中で次から次へと突っ込みを入れる。

だが晴真は勝手に話を進めた。

「ちなみにこの子は海堂静希、七歳。今年、小学一年生になった。俺の大事な宝物だ」

激突しそうだった子供は、紹介されて「よろしくね？ 勇生」とこれまた勇生を呼び捨てにした。

「あー……、うん。これから気を付けて自転車の練習をしろよ？ 怪我しないようにな？」

「はい」と返事をした静希が腹の虫を盛大に鳴らし、顔を真っ赤にさせた。

「腹減ったのか」

「えっと……その、真剣に自転車に乗る練習していたから……」

頬を赤く染めた美少年を前にすると、何かいけないことをしている気になる。何もしてないけど。

静希の視線が、ベンチの上のサンドウィッチ弁当に向けられた。だが彼は子供ながらも立派なプライドを持っているのか、すぐに視線を逸らした。

「晴真、お腹空いたからお店に行こうよ」

「え？ 俺はまだここにいたいんだが……いやいやいや、お前の願いを聞きたくないと言うわけでもなくだ……」

俺より年上なのに、子供を相手に何を言ってやがる。

勇生は自分のサンドウィッチを一つ掴むと、「アレルギーがないなら大丈夫だと思う」と静希に手渡す。具は、厚焼き玉子とスパムソーセージだ。お子様には丁度いい。

「ないよ！ 僕も好き嫌いない！ アレルギーもない！ ありがとうございますっ！ 凄く美味しそう！」

静希は両手でサンドウィッチを持って、その場で飛び跳ねて喜んだ。

一方晴真は、勇生をじっと見つめて無言の圧力を加える。

たとえ電波を発しようと、さすがに自らねだる真似はできないのか、視線だけで訴えてきた。

「ったく。仕方ないなあ」

そう言いつつも、食べ物で意地悪をしたくない勇生は、晴真にもサンドウィッチの包みを一つ渡す。大人の晴真には、大人の味付け的鶏ささみが具だ。

「ありがとうございます。いきなり手作りとはハードルが高そうだがありがたく戴く。旨いと嬉しいな。取りあえず、じっくり味わって食べよう」

ところどころ俺に対してとても失礼なことを言ってないか？ あんた。

勇生の突っ込みが追いつかないのを知ってか知らずか、晴真は静希と仲良くベンチに腰をかけ、仲良く「いただきます」と言った。

姿勢正しく、脇を締めて無言で食べる親子（仮）の姿を見て、彼らは躰の行き届いた家で育ったのだなと思った。

その横に腰を下ろし、紙コップに温かなアップルフレーバーのお茶を入れて差し出す。

「熱いからな？ 火傷をしないように気を付けて」

「ありがとう、勇生。僕ね、厚焼き玉子のサンドイッチ、初めて食べた。凄く美味しい」

静希は瞳を輝かせて、ようやく半分ほど食べたサンドウィッチを口から離し、今度はそっとお茶を飲む。

「いい匂い……」

晴真はまたしても目で訴える。

図々しいもここまできると逆に清々しい。

勇生は苦笑を漏らして「子供が先だろう?」と言って、晴真にお茶の入った紙コップを手渡した。

「かなり旨いサンドウィッチだな。意外だった。意外すぎるほど旨かった。具が多いのがいい。食べ甲斐がある。しかも野菜と肉のバランスがいい。女性受けもいいだろう。勇生の仕事はシェフか? もし雇われているならそこはやめろ。俺が出資してやるから店を出せ。それがいい。俺は毎日お前の手作り料理を食べに通う。最高じゃないか。最高に幸せな世界……」

晴真は勝手に勇生の仕事を語り、一人で楽しんでいる。

出資という言葉に一瞬だけ食指が動いたが、すぐに我に返った。このご時世、そうそう旨い話は転がっていない。あるとしても、それなりの対価を払わねばならないだろう。

家事、特に料理が得意な勇生はシェフに憧れたが、それを仕事にしようと思うほど自信はない。

「俺は、家事は仕事にせず趣味がいい。あと、俺の本職は国内旅行と食べ物のライターだ」

なんで会って十数分の男に自分の職業をバラしているのだと、勇生は己に驚いた。だが、晴真の「俺のお気に入りのフードライターは吉松勇生と言う」という言葉にも驚いた。

今まで自分の職を言った後は、「本をタダでくれ」「旨い店にタダで入るんでしょ?一緒に連れてって」など、とにかく無料で美味しいものを食べたいという人間に絡まれた。うんざりだった。それ以来勇生は合コンの数合わせや、義理で仕方なく出なければならない飲み会で「仕事はなに?」と聞かれたときは「編プロで事務と雑用」と答え、人々の好奇心を刺激するどころか「その年で雑用?」と哀れまれることにしていた。

それが楽なのだ。

なのに。

「名前が一緒なのは偶然か?彼は絶対に雑誌に顔を出さないが、とにかく、文章の中に店とシェフと料理に対する敬意がある。読んでいて気持ちがいい。しかも、彼が紹介した店は嘘偽りなくすべて旨い。最新ムックでスイーツに挑んだのもいい。俺は意外と甘味も好きだ」

晴真は「コレを見ろ」と言って、紙コップをベンチに置き、パンツの尻ポケットから携帯電話を取り出すと、「ライター 吉松勇生」のSNSを勇生に見せた。

喜怒哀楽の乏しそうな美形だが、胸を張ってもったい付けて見せるその仕草のお陰で、明らかに「ドヤ顔」だと分かる。

「俺は彼をフォローしている」

「え?マジで。ありがとう」

言うてから、勇生は「またやってしまった……」とため息をつく。

「やっぱりそうなのか?このSNSのライター・吉松勇生は、お前なのか?」

「あー……………うん、まあ。こんなところでフォロワーに会うとは思わなかった」

「今日はなんていい日なんだ。俺が霊能力者なら、天使たちの祝福が見えただろう。ありがとう、世界。ありがとう、今日の運勢。お気に入りのライターが、俺の愛天使だったなんて、有り得ない偶然。いやこれは偶然と言うことではませるはずがない。必然だ。起こるべくして起きた奇跡。今ここでハレルヤを歌いたい気分なんだが……！」

やめて、それやめて。淡々とハレルヤを歌いそうで怖いから。ここの川っぺりで、たまに発声の練習をしている学生や若い役者がいるけど、あんたは明らかに違うでしょ。

勇生は心の中で突っ込みを入れた。できれば声に出したかったが、百倍になって戻って来そうだったので諦めるしかなかった。

「……晴真、おしゃべりはご飯を食べ終えてからでしょ。大人しくして」

静希の一声で、晴真は「そうだった」と頷き、再び腰を下ろして残りのサンドウィッチを食べ始める。

静希はただの美少年じゃなかった。この子はおそらく、とても賢い。

勇生はそう確信して、自分も食事を再開した。

「勇生はサンドイッチの他に何が作れるの？ ハンバーグとかミートソースは？」

綺麗に食べ終えた静希は、子供らしい好奇心で勇生に尋ねる。

「だいたい何でも作れるぞ。甥や姪の食事と弁当も作ってたからな」

「ケーキも？」

「ああ、よく作った。一度、三段重ねのケーキを作ったことがあったなあ。作るのは楽しかったが、食べるのが大変だった」

甥と姪の母親でもある勇生の姉たちは、仕事で朝早く帰りが遅い。自分たちのために働いてくれているのだと頭で分かっているけど、気持ちが追いつかない甥と姪たちのために、勇生は笑ってしまうような大きさのケーキを作ったことがあった。直径の異なる三つのスポンジケーキを焼き、生クリームと果物をサンドし、綺麗にコーティングした。

甥と姪たちの大歓声は、彼らが中高生になった今でもすぐに思い出せる。

「……いいなあ。手作りのケーキいいなあ。僕も食べたい。……その、今すぐってわけじゃないんだけど！」

静希は頬を赤くして、必死で釈明した。

「子供なのに気を遣うなよ。そうだよな？ お父さん」

お父さんと呼んでやったのに、晴真は真顔で首を左右に振る。

「俺は独身だが」

「はあ？ じゃあ、この子は何なんだよ。顔もよく似て……」

勇生は途中で口を閉ざした。

人にはいろいろと事情がある。ついさっき出会ったばかりの自分が口を出すことではないし、なにより

目の前に子供がいる。

「察してくれて幸いだ。勇生は賢くもあるのだな。可愛いだけで、よくも今まで世の中を渡ってきたと思っていた」

「ふざけんな、表情筋を使えない美形の電波。子供のためを思うなら、その不思議な物言いはやめて普通に戻れ。そうすれば、すぐに嫁が見つかるはずだ」

お節介も甚だしいが、取りあえず言った。

どうせもう二度と会うことなどないのだ。

「いやだから、嫁なら今日の前に……」

「俺は充分日光浴したので、さっさと帰ります！」

するといきなり足元で「帰っちゃうの？」と可愛い声が響いて、静希が足にしがみつく。

「今すぐってわけじゃないんだけど、僕はいちごの三段ケーキを食べるのが夢です！」

「……ああ、そうだったな。ケーキだったな」

作れると期待だけ持たせるのは、甥姪の世話をしてきた勇生にはできなかった。子供はいつも素直で真剣なのだ。こちらも真剣に向き合わねば。

「じゃあ、来週の土曜日、この場所で……」

「あのね、うちのキッチン凄いんだよ。大きなオーブンもあるんだ。お菓子だけじゃなく、きっと美味しいご飯も作れるよ！」

「そうか」

やけに一生懸命だなと思いながら静希を見下ろすと、少年はちらちらと晴真を見ている。だが晴真は気づいていないようだ。

何かあるなと思った。

七歳の子供なのに他人を気遣うようなことを言ったり、無邪気に笑ったと思ったらすぐに澄まし顔になったり、静希はいろいろと「面倒臭い子供」のようだ。

むしろ、いやきつと、晴真の方が扱いやすいのではないかと思う。

「でもな静希君。知り合ったばかりの人の家に上がるのは失礼だと思う。だから……」

「仲良くなるのに時間はいらなくて、先生が言ってた。フィーリングだって。第一印象も大事だって。僕は勇生をうちに招待したいです。とにかく凄いから見に来て」

さてどう断る。その前に、そこの保護者！ 期待に満ちた眼差しで俺を見るな！

勇生は晴真を一瞥し、ため息をつく。

「その、なんだ。子供の可愛いお願いの一つだ。聞いてやってはくれないか……？」

「あんたが安全な人間だと分からないままで？ ん……？ あれ？」

晴真が少し困った顔で、長めの前髪を掻き上げる仕草を見て、勇生は首を傾げた。この男、どこかで見たことがある。これだけの美形だから一度見たら忘れるはずはないのに、今までピンと来なかったのは、彼が体から出しているオーラと服装が「オフ」だったからだ。

「なあ、あんたの名前……」

「海堂晴真。お前が覚えてくれるまで何度でも耳元に囁こうか」

「いやいい。海堂晴真……ええと……」

そういや、島村さんが「アパレルと食」ってテーマで、いろんな有名人著名人のインタビューをしていたな。俺も一度、助手として付き添って、旨い飯を食ったことがある。確かあのビルはカイドウ・タワーで、グランドフロアのカフェカイドウが、夜にはビュッフェディナーのレストランに…………カイドウ・タワー！ 思い出したっ！

勇生は両手を伸ばし、小首を傾げている晴真の前髪をぐいと掻き上げて、簡易オールバックを作る。

「そうだこの顔だ！ 俺たちのテーブルに挨拶に来た男！ 海堂グループの、アパレル&コスメ部門の専務取締役だっけ？ 肩書きはまあいいや、女性社員の『玉の輿に乗りたい』ナンバーワン男！」

「…………自ら俺に触れてきたということは、合意ととっていいんだな？ しかも髪に触れた。親密にならなければ他人の髪に触れるという行為はしない。つまり、たった今からお前は俺の妻。新婚旅行はどこがいい？ 俺は天国に一番近い島へ行きたい……」

「落ち着け。あんたのプロフィールは俺が言った通りで合っているか？」

「合っている。しかし、すでに出会っていただと？ 当時の俺は、余りの忙しさに自分の運命の相手さえスルーしていたのか。最悪だ。だがここで帳尻を合わせることができた。ありがとう運命……」

晴真が淡々と語り、勇生の腰に力強く両手を回す。

いつの間にか、釣りをしていた男性たちが面白そうな顔でこちらを注目していた。

「勇生……」

「ちゃんと知ってたね！ 知らない人じゃない。会ったばかりの人じゃない。だから僕は勇生をうちに招待する。勇生ならきっと、僕たちの家を助けてくれる！」

静希が晴真の言葉を遮って、上目遣いで「お願い」と両手を合わせる。まるで聖歌隊の美少年、いや天使と言った方が正しい。それだけの威力があった。

「う……」

「ほら！ 晴真も変なことばかり言ってないでちゃんとお願いしようよ。ね？」

天使の声に、晴真も真顔で口を開く。

「あ、ああ。……すまない、幼子に諭されてしまった。良かったら我が家にお茶でも飲みに来てくれないか？ 正々堂々と、そして健全にもてなしたい。健全だ」

言っていることはやはりちょっとおかしいが、本気を出した美形の威圧感はとんでもない。

勇生は、晴真の前髪を掻き上げたままで「ではよろしくお願ひします」と言っていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>